

# 最凶魔術師の

異常なる逃亡生

VOLUME II

ジョンディー  
【イラスト】

ピンク色伯爵  
【小説】

試し読み版

I プロローグ	006
II 方針と解説	023
III 勧誘と決闘	033
IV 決闘と勧誘	055
V 夜這い	069
VI 嵐の前	089
VII 嵐来る	101
VIII 地底の告白	122
IX サキュバス純愛セックス	142
X 選択	160
XI 迷宮の守護者たち	171
XII 緋剣、牙を剥く	187
XIII 再会	208
XIV 第二皇女と將軍、生まれた歪	229
XV 危険な協力要請	238
XVI 彼女の理由	256
XVII 疑惑	271
XVIII 取引・決戦前	283
XIX 異変	300
XX 未来 × 覚醒 × 翼 I	313
XXI 未来 × 覚醒 × 翼 II	333
XXII 未来 × 覚醒 × 翼 III	352
XXIII 真相は消えて	368
XXIV エピローグ	382



失われた神の迷宮の章

## プロローグ

広い地下空洞には青い光が満ちている。

光は茶色い岩肌のいたるところに群生している苔によるものだ。確か光苔と言ったか。冒険者ギルドで聞いた話によると不死者の迷宮ではそう珍しいものではないらしい。

光は空洞の細部までは届かない。

概ね床が平坦なこの部屋は、時折大岩や尖った岩のでっばっていて視界を遮る作りになっている。青い光が十分な光度を持っていないせいもあってハイエルフの視力をもってしても全容を把握することは難しい。

しかし、音の反響の仕方からしてだいたい五十メートル四方の広さだとシルウィは思った。

「シルウィ姉」

「なに、リリナ？」

隣をひたひたと音を殺して進む和装の少女に顔を向ける。

長い黒髪が青白い顔を半分隠している。リリナは少し前かがみになってファルシオンの柄つかに両手を当てていた。いつでも抜刀できるようにと構えを取っているのだ。

「……いるわ。一番奥の祭壇に」

リリナは悪魔という暗黒の種族だ。その両目はどんな暗闇も見通す。シルウィには見えないところまで彼女はこの地下空洞の構造を把握しているのだろう。

「祭壇の奥、玉座がある。そこに誰かが座っている」

「——」

シルウィはごくりと唾を呑み込んだ。下段に構えている白銀の可変武器——アイオンを握る手に力を込めた。この時シルウィは初めて自分の金色の髪が邪魔だと思った。闇の中でもきらきら輝いているようで妙に気が散る。おまけにこの金色のせいで敵から見つかってしまうのではないかと的外れな不安を抱いてしまう。髪の色で見つかるわけがない。

目立ちやすいつか目立ちにくいとかそういう問題ではないだろうから。

おそらくこの空間に入った瞬間に、玉座に座るモノはシルウィの全身を詳細に確認することができている。少し日焼けした小麦色の肌、エルフの伝統的な緑色の狩り衣装、ミニスカートの下からすらりと伸びる健康的な足のすべてをだ。

ハイエルフの勸が告げている。

敵はシルウィとリリナを見て舌なめずりしている。

不死者は質のよい生者の肉を常に求めるものなのだ。

「空気がピリピリしてるね」

「シルウィ姉」

「うん。——来る」

シルウィがそう言った瞬間、空間が一気に明るくなった。

部屋たまの周囲に設置されていた松明たまが一気に炎を灯したのだ。

光苔の青色よりもはるかに強い光は、果たしてこの岩の部屋がシルウィの予想通り五十メートル四方であることを明らかにしてくれた。

そして二人が立っているのは入り口付近。

リリナの言っていた玉座は——部屋の最奥にあった。王が座るための椅子と言うには粗末な見た目をしている。地面の岩と同じこげ茶色の三メートルくらいの椅子。

そこに一つの影があつた。

人形だ。しかし『ヒト』ではない。

掠れたうめき声が上がリ、すぐにそれは低く囁くような呪文の詠唱に変わる。

果たして玉座から立ち上がったのは、薄汚れた騎士鎧を着た大柄なアンデッドだつた。落ちくぼんだ両目には光がなく、顔は屍蠟化してしまっている。右手には剣と言うにはあまりにも無骨すぎる鉄塊を携えている。おそらくもとは身の丈ほどもある大剣——人を相手にすると言うより獣の首を一撃で刈り取ることを目的とした武器だ。

アンデッドの騎士は詠唱しながら鉄塊を指で撫でていく。すると風化した剣身が白く輝き始めた。あれで切れ味がどうのというのは関係なくなつたようだ。

シルウィは既にアンデッドの騎士に魔力を向けてい

た。

発動させたのは対象を直接炎熱で焼き尽くす魔術だ。通常の戦士相手なら敵の魔術抵抗に邪魔されて効果が薄い、アンデッドは抵抗力が極端に低いから簡単に炎上させられる。戦闘が始まる前に終わらせることができるのだ。

ハイエルフの膨大な魔力は簡単に大柄な騎士一人を丸呑みするほどの炎を作り出した。鈍色の甲冑が強烈なオレンジ色の光に包まれる。

「……………！」

アンデッド騎士は欠けた歯の並ぶ口をがばりと開けてよろめいた。シルウィの身の丈ほどもある剣がブンと出鱈目に振り回される。

人ならば断末魔の叫びでも上げている最中だろう。戦闘は終わった——そう考えてシルウィは右手を下ろした。同じように前衛のリリナもファルシオンを構える手を緩めていた。

だがそれも一瞬。次の瞬間、二人は驚きに目を見開いて左右に跳び退った。軽く跳んだという程度ではな

い。地面に体をぶつける勢いでのならり構わない緊急回避である。

「なっ——」

岩の地面の上で受け身を取ったりリリナの息を呑む声。シルウィは器用に受け身を取って膝立ちになると同時にアイオンを構えていた。

二人が先ほどまで立っていた場所には白い煙を鎧の隙間から出しているアンデッドの騎士の姿が。鉄のだんびらを振り下ろし、岩の床から引き抜くところだった。

炎が効いていない。

シルウィは矢による牽制を行いながら背後に跳んだ。「シルウィ姉！」

「うん。たぶんこいつの鎧だ」

騎士の周囲をじりじりと回りながら答える。ついでに弓形態のアイオンの機巧を組み替え双剣形態へ移行させる。ガキ、ガキンと高い音と共にアイオンは二つに分かれた。

「——」

アンデッドの騎士は無言でシルウイのほうへ顔を向ける。一方で大剣の切っ先はリリナを向いている。むやみやたらと攻めてくるのではなく、こちらの様子を窺っているらしい。なるほど、これは普通のアンデッドとは違う。

冒険者ギルドから指名手配された不死者の迷宮に住む危険種というだけはある。

シルウイの放った矢は鎧の隙間に突き立っているがこれも効いている様子はない。アンデッドには血も痛みもないから、なんの魔力付与もされていない普通の矢が刺さったところで動きに支障を来さないのだ。

——火葬の意味を込めた魔弾を撃てれば……！

リリナと挟撃する形で騎士の周囲を回りながらシルウイは菌嘔みする。

体内に直接魔力を送り込むことができれば、あるいは彼の着ている鎧の対魔力も発現しないかもしれない。里で年配の狩人たちがやっていたのを見るに、土から錬成した矢に『火葬』の意味を込めた魔法言語を刻みこめば魔弾になるのだろうか、今のシルウイは魔法言

語をきちんとマスターできていない。

こうなったら物理的に敵の鎧を破壊するしかない——シルウイはこめかみに汗を滲ませながらそう決意する。

アンデッドの騎士は鉄塊を肩に担いでこちらを悠然と見下ろしている。

アレと今から近接で戦うのだ。

「シルウイ姉、じわじわ削っていきましよう」

「ん……、それしかないよね」

「まず私からいくわ」

言いながらリリナは身を低く構えた。そして間髪容れずに地面を蹴り、一直線にアンデッド騎士に向かって飛び込んでいく。下段からファルシオンの切り上げ盾を持っていないせいでがら空きの左上体を狙っているようだ。

リリナは鋭くプレスすると同時に騎士の首筋をなごうとする。

しかし剣が弧を描く途中で止まった。リリナがはつと目を見開き後ろに跳んだのだ。少し遅れてカウンタ

いで放たれた白く発光する大剣が異様な音を立てて通過していく。後ろに跳ばずに剣を振り切っていたら死んでいた。

地面にもんどりうって転がり、それでも何とか体を起こそうとするリリナ。そこにアンデッド騎士の流麗な剣捌きが襲いかかる。

大剣の刃を返した騎士は左足右足左足の順番に踏み込みつつ地面に這いつくばっているリリナの脳天目がけて大剣を振り下ろそうとする。シルウィは咄嗟に土魔術で騎士の足元を脆くして岩の地面を踏み抜かせることでこれを阻止。

騎士はバランスを崩しながらも頭を潰そうと剣を追尾させるが、リリナがなりふり構わず一気に距離を取ったため攻撃は失敗に終わった。

代わってシルウィがアンデッド騎士の背後から襲いかかる。

完全な死角からの奇襲だ。

反応できるはずもない。

シルウィは白銀の双剣を重ねて騎士の露出した首筋

を狙う。

「——っ」

しかしこれも失敗。

大剣を地面に振り下ろした状態だった騎士は、剣身を支えに自分の体を浮かせ、反動をつけてシルウィの顔面を強打しようとしたのだ。エルフの近未来予知でこの光景を視たシルウィは、寸前で踏みとどまり背後へ跳んだ。遅れて騎士の古びた軍靴がシュッと鋭い音を立ててシルウィの鼻先を掠めていった。

「……っ。ま、マジ……?」

「シルウィ姉!」

驚愕し怯むシルウィに騎士は剣を引き抜いて追撃する。振り下ろしは横に転がって避けたが、続けて剣先がガリガリとすさまじい音を立てて岩の地面を滑ってきた。地面に剣を引っかけながらの必殺の切り上げ。岩の地面から火花が散り、音と光に反応が一瞬遅れる。

——ダメ……!! 死ぬ……!!

そう思ってシルウィがぎゅつと目を瞑ったとき、不意にアンデッド騎士の側面から銀色の弾丸がいくつも



飛来した。

「——!」

騎士が口を開ける。低いうめき声。生きていどころなら絶叫の一つでも上げていたかもしれない。よろめく騎士を見てはつと我に返ったシルウィは転がって十メートル以上の間合いを離れた。十メートルあればどうにかなる。再び膠着状態こうちやくに戻せる。

双剣を構えつつ身を起こしたシルウィは、眼前によるめくアンデッド騎士を見据えながら息を吐いた。

「ちよつとアール! こいつ強すぎない?」

リリナが半泣きの顔で闇に向かつてそう叫んだ。

「——」

「無視しないでよ、馬鹿アール!」

「リリナ、師匠に向かつて馬鹿はないよ。危なくなったらきちんと助けてくれるんだから」

「で、でも、一步間違えたら死んでいたわ!」

「いいから、もう一回集中して」

言いつつ裂けて血が出た頬を手の甲で拭う。

大剣を黒い鎧に背負って獣のように身を屈めている

アンデッド騎士を慎重に観察する。

体の大きさは二メートル半くらい。アールよりも背が高くてもかなり威圧感がある。剣も長大のだが、彼の凶体のせいで小さく見えるくらいだ。

動きは緩急にメリハリがついている。

全然動かないと思えばいきなりリリナやシルウィと同じくらいの速さで動いてくる。そのせいでタイミン  
グを計りにくく、気を抜いていると一瞬で真つ二つに  
されそうになるのだ。

——体が大きいこともあって攻撃を避けるのが難しい。

近接はやはり自殺行為だ。

ならば遠距離から魔術で削っていくか。

でもあの鎧を着ている限りまともな魔術は通らない。

「……どうやって倒せばいいのか?」

「私の魔術じゃたぶんキャンセルされちゃうし、無闇に近寄れないからほぼ攻撃手段がない……」

リリナが歯噛みしながらそう言っている。

とすれば——シルウィは目を細める。

「やっぱり足元を崩すしかないか。で、こいつがバランスを崩した瞬間にリリナの秘剣で倒す。どうかかな？」

「こいつ……ファルシオンで斬ったら死ぬの？」

「どうだろ？ 首や腕を切断できれば物理的に動けなくなりそうではあるけど」

「——分かったわ。やります。つべこべ言わずにやってやるわ」

「やけくそだね……」

「合図お願いね、シルウィ姉」

「うん」

アンデッド騎士は動かない。

まさかシルウィとリリナの会話を理解しているわけではないだろうから作戦内容は伝わっていないだろうが——、しかし不気味である。

シルウィとリリナは再びじりじりと彼の周囲を移動しながらタイミングを計った。

空洞に松明の燃える音だけが響く。

暗闇の中でアンデッド騎士の落ちくぼんだ双眸がらんと赤く輝いていた。エルフの森の奥底に潜むと

いう獐猛な魔獣たちはこうして赤い光を目にちらつかせて、寄ってきた小動物を狩って食べるという。もしかしたら自分たちもこの騎士に誘われているのではないかとシルウィは思った。でもこいつを倒すには近寄って斬るしかないのだ。誘いには真正面から乗るしかない。

「三、二——」

ジャリとシルウィのブーツが音を立てた。リリナのファルシオンが武者震いするようにイイイインと高い音を立てた。

「一、今！」

掛け声と同時に魔力を発動させる。アンデッド騎士の足元を丸ごと陥没させるような大規模な土魔術である。シルウィの膨大な魔力は騎士の鎧が持つ魔術抵抗を貫通し、いとも簡単に岩の床に罅ひびを入れた。パキリと騎士の軍靴の下から嫌な音が響き、巨体が一段下に沈みこむ。

騎士の周囲は、角ばった岩がそこかしこから顔を出す足場の悪い地面に早変わり。

そこをリリナは器用に爪先で飛んで肉薄していく。

「……………」

騎士はバランスを崩しながらも強靱な足腰で踏みとどまり、一気に飛び込んでくるリリナを正確に見据えた。剣はリリナのほうが先に届くだろうが敵はアンデッド。一撃では死なずに、返す刃で叩きつぶされてしまうだろう。

「……………っ！」

「リリナ！」

リリナはもう止まれない——シルウィは咄嗟に弓で援護するべく矢筒から三本引き抜いた。

——間に合って！

エルフの奥義、速射が間に合わなければリリナの体に大剣が直撃コースだ。

アールが助けてくれるのは分かっているが、それでもシルウィは腋の下からじつとりと汗がにじみ出るのを感じた。

奥の闇からアールの魔力が燃え上がる。銀色の閃光がシルウィの目の端に煌めいた。次の刹那にアンデッ

ド騎士目がけて発射されることだろう。

——リリナは助かるけど、私たちにはこの程度の相手もまだ倒せないってことか……。

シルウィは矢を放ちながら呆然とそう考えた。

自分たちの未熟さは知っていたつもりだったが、それにしても不死者の迷宮の浅層にいる程度の危険種アンデッドも倒せないなんて。

全然ダメ。

本当にダメダメだ。

これでは二人でヒュドラを倒すなんて十年かかっても無理。

——こんなので大丈夫なのかな……。

無力感からくる気だるさが全身に満ちる。

シルウィは思わずその場にへたり込みこけて、ふとこの空間の入り口に無数の人の気配を感じて振り返った。

そして。

「下がってください！」

不意にそんな凜とした声が響いた。

遅れて、アールの水銀弾を身に受けてよろめいているアンデッド騎士に魔法言語が刻みこまれた矢が大量に降りそそいだ。

「——」  
アンデッド騎士が声にならない絶叫を上げる。いくら魔法の鎧を纏っているとはいえ、魔弾を二十も三十も頭上から降らされて耐えられるはずもない。着弾した魔弾はすべて爆裂していく。大火力の焼却に騎士はなすすべもなく蹂躪され、火だるまになった。

革の軍靴が岩を叩く音が無数に響き渡り、あつという間にシルウイの前に軍服を着た女性たちが躍り出た。

帝国軍の一般兵のつけている甲冑ではない。

赤と黒を基調としたどこかフェミニンな革鎧だ。

しかも見る限りいるのは全部女性。

「大丈夫でございますか？」

傍にやってきた背の高い女性兵士がシルウイの顔を覗き込んでそう訊いた。ふわりと花のような香りが鼻をくすぐった。エルフの女がよく使う香水の香りである。見れば彼女のシルエットは長い耳に長髪だった。

間違いなくエルフだ。顔は——よく見えないが。

「あ、えつと。はい、大丈夫、です」

「隊長、こちらのほうは怪我がないそうです」

「そうですか。それはよかったです」

闇の中でエルフの女性に答える声。さつき「下がってくださいい！」と大きな声を出したのはこの「隊長」と呼ばれた女性だろう。

「私も大丈夫です。助けていただきありがとうございます」

人垣の向こうからリリナの悔しそうな声が聞こえてきた。

アンデッド騎士に突貫したのは完全な失策だったことを今更のように後悔しているのだろう。

——それにしても、この人たちがすごい手練れだ。

シルウイはアイオンを下段に構えたまま用心深く周囲の人影を見回す。

アールと出会ったばかりの頃なら分からなかっただろうが、ここ数日の気ちがいじみた猛特訓で能力が格段に上がっているのだ。実力が低いうちは高い山を見

てもただ「高いなあ」と感じるだけだっただろうが、少し背が高くなった今だからこそ分かる。

体幹のバランス、纏まとっている魔力の質と量、そしてそれぞれの顔にらんらんと光る猟犬のような鋭い目。間違ひなくここ数日で出会った帝国軍・上級冒険者たちよりもはるかに強い。

たぶん、この人たちなら先ほどのアンデッド騎士など単独で簡単にひねり潰してしまっただろう。

シルウィは知らずアイオンを握る手に力を込めた。

助けてくれたから味方——なのだろうが、すさまじい手練れがたくさん周りにいるというだけで否応なく緊張してしまふ。

すぐ傍で『隊長』と喋っているエルフの女性からは焦げたような臭いがぷんと香った。

この女性が先ほどの魔弾を放ったのだ。

シルウィがまだ使えない強力なエルフの奥義を。

「シルウィ姉」

無言で周囲の人影を数えていると、人ごみの向こうからリリナがやってきた。微妙そうな顔をしている。

助けられたこと以上に事情聴取など厄介な事態に発展しないか心配しているらしい。

「ねえリリナ、この人たち……」

「帝国軍の人かしら？ それにしてもすごい……」

すごい手練れと言おうとしたのだろう。だけど悪魔の少女は寸前で思いとどまった。実力が分かるということはこちらもそれなりの実力者だと公言するのと同然だからだ。シルウィたちの現在の実力はランクBの冒険者程度。魔術を絡めてうまく戦えばランクA相当に匹敵する。そんな二人組がFランクで、しかもこんな人気ひとけのないところで危険種アンデッドと戦闘しているなどなにかおかしいと勘ぐられてしかるべきだ。リリナの判断は正しいと言える。無用な疑いで詰め所に連行されないよう、ここは迷った挙句に危険種と偶発対峙してしまつた駆け出し冒険者を装うのが得策である。

二人が黙っているとエルフの女性士官（？）の横をすり抜けて細身の少女騎士が姿を現した。

——銀髪？

肩までの髪だ。

格好は周りと同じ赤と黒の革鎧だと思う。

腰には二本のサーベルを差している。一本は折れてしまったときのための予備だろうか。

「綺麗な人……」

横でリリナがポツリと呟いた。陶酔したような声だ。美少女であるリリナから見てもこの『隊長』さんは美人だということだろう。

——そう言えば周りの人たちも皆すごい美人のよう  
な。

暗いからはつきりとは言い切れないがたぶんそうだ。そこらの高級娼婦と遜色そんしよなくらい。それに兵士なのに物腰などから気品きひんのようなものが漂ってきている。

「お二人とも冒険者ですか？」

銀髪の『隊長』さんが尋ねる。

「え、はい。まあ」

「そうです。シルウィ姉と私、迷宮で一儲けしようと思つてここまで来たんですけど、運悪くあんな危ないのと出会っちゃつて。おかげで助かりました。貴女た

ちが来てくれなかつたらどうなつていたか分かりませ  
ん」

どこかで隠れて見ている性魔術師へ向けた言葉だろ  
う。若干のとげとげしさが混じっている。

「そうですか。それは災難でしたね。こんな浅層では  
本来あのような強敵は出るはずありませんから。せ  
いぜい腐食スライムか、アンデッド化した冒険者たち  
程度でしょう」

「そうですね」

シルウィは頷きながらも内心恐れおののいていた。  
腐食スライムは剣で切つても死なない相手で、薬品  
か魔術攻撃でないと倒せない相手だ。しかも体にスラ  
イムがかすつたら激痛で頭が真っ白になる。初遭遇時  
はそれで失神した。

アンデッド化した冒険者は同じく切つても死なない  
敵で、腐肉が付いている場合は打撃でも倒せない凶悪  
な相手になる。火の魔術で焼くのが一番だが、こちら  
はスライムと違つて素早い。生前の動きをそのまま使  
つてくるものだから、不死者の迷宮に挑むような手練



れの冒険者の強化版と戦っているようなものだ。最初は一体倒すのにリリナと二人で二十分もかかった。今は一人で平均二分くらいで倒せるが、それでも油断は禁物の相手である。

そんな魔獣たちを完全に下に見ている発言。

この凄腕集団の『隊長』なだけある。

銀髪の少女には隙らしい隙がなかった。

シルウィが黙っているとりリナが口を開いた。

「あの、失礼ですが貴女がたは一体何の集団なんですか？」

「私たちはワルキューレ部隊です」

「ワルキューレ部隊？」

シルウィがそう訊き返すと、銀の髪の少女は闇の中でふわりと笑ったような気がした。

「はい。通常の国軍とは少し毛色の異なる——マーガレット皇女殿下直属の近衛兵団と言えば伝わるでしょうか」

「はあ」

マーガレットというのは先日ヒュドラ討伐の式典で

壇上で演説した赤髪の美女のことだろう。第二皇女マーガレット・ホワイトドラゴン。皇位にありながら軍事の力も有するという傑物という話だ。

「フランチェスカ隊長」

「分かっていきます、ローラ。——さてと。私たちは役目を果たしたことですし地上へ戻ります。よければ一緒に戻りませんか？」

「結構です」

リリナが即答する。

「あ、えっと、私たちまだ今日のノルマを達成してないっていうか。もうちょっと稼いでいきたいっていうか」

「そうですね……？ でも大事を取って一旦戻られたほうがよいのでは？」

「お気持ちだけ受け取っておきますわ」

リリナが丁寧拒絶した。こういうときのリリナはシルウィから見てもとても絡みづらく感じてしまう人のよさそうな『隊長』さんも少し引いたように曖昧な笑みを浮かべた。



——あれ、この人意外と普通な人？

強い人には変人が多いという謎の法則が出来上がりつつあったがゆえの失礼な驚きである。シルウィは改めて目の前の少女を見つめた。

堂々としているが細い上に背もシルウィよりちょっと低いくらい。

もしかすると歳も近いのではないだろうか。

「本当に大丈夫でございませうか？」

シルウィの近くに立っているエルフの魔術師が心配そうな声で尋ねてくる。この人にも穏やかで優しいような『いい人』の雰囲気があった。

「私たちは大丈夫なので。ほんと、お気持ちだけで」

「そうでございませうか……？　しかし、この空間からはなにか嫌な気を感じます。なにか——途方もなく強大で邪悪な存在が潜んでいるような」

「それは本当ですか？」

銀髪の少女が胡乱ぐらんな声を上げた。

「ええ、隊長。先ほど一瞬だけ感じたような気がしただけなのではつきりとは言えませんが」

「皆、すぐに周囲を搜索してください」

間髪容れずに銀髪の少女が指示を飛ばす。

シルウィとリリナが戦々恐々とする中、空洞内の探索が行われていく。

猟犬のような女性士官たちによる搜索だ。アールが見つかってしまったら絶対にややこしいことになるに違いない。

しかし、幸いなことに搜索は空振りに終わった。

シルウィとリリナがここにいる以上、アールは間違はなく近くに潜んでいるはずのだが、ワルキューレ部隊たちはついに彼を探したことはできなかったのである。

「……誰もいませんか」

「私の勘違いだったようでございますね」

「いいえ。私も指摘されて妙な違和感を覚えました。誰かに見られているような不気味な感覚と言いますか……。しかしなにもいないのなら勘違いということなのでしょう。——時間をずいぶん使ってしまったので、速やかに退きあげます」

銀の髪の少女が隊員たちを順々に見回しながらそう宣言する。

彼女は最後にもう一度シルウィとリリナに振り返った。

「それでは我々は地上に戻ります。貴女がたも冒険者の仕事が大切なのは分かりますがほどほどにして地上にお戻りください」

「ど、どうもー」

「丁寧ありがとうございます」

「では失礼します」

少女はそう言って軽く頭を下げると踵かかとを返した。他の隊員たちも次々にシルウィたちに挨拶をして『隊長』さんのあとに続いていく。

無数の軍靴の音が遠くなり、やがてまったく聞こえなくなるとシルウィとリリナは大きく息を吐いて脱力した。

「すごい集団だったねー」

「ええ。帝国の正規軍ってあんなにたくさんの手練れがいるものなのね。威圧感がすごいというか。って、

うわあ。私めちやくちゃ手汗かいてちゃっているわ。やだもぅ……」

ポケットから布きれを取り出して手を拭う義妹を尻目に、シルウィは恐る恐るといったふうに闇に向かって声をかけた。

「アール君、いる？」

「うむ、ここにいるぞ」

間髪容れずに張りのあるテノールが返ってきた。

シルウィのちょうど斜め前。先ほどまで銀髪の『隊長』さんやエルフの女性士官が立っていた空間からである。しかし身長百九十センチ以上あるはずの大男の姿はどこにも見当たらない。

「え、どこ？」

「さっきこの辺から声がしたわよね。……岩の地面に罅ひびが入っている……？」

「うむ、今出るぞ」

性魔術師のそんな声のあと、岩にできた罅の間からによーんと黒い軟体生物っぽいなかが飛び出してきた。うねうねと蠢うごめく触手のようなその先端には、ラ

イトブルーの瞳に折れた鉤鼻というシルウィとリリナにはなじみの深い顔が付いていた。

「ククク、どうだ？ 東方にある暗殺教団に伝わる秘技でな。こうして体を触手みたくうねうねのうにようよにして細い隙間などに潜り込むのだ。すごいだろう？ 僕が自慢できる数少ない特技の一つと言つても過言ではな——」

「きゃあああああああああああああつ?! きもつ! きもつ! アール君キモすぎいッ! なつ、なにがどうしてそんな芋虫に顔が付いたみたいな気持ち悪いことになつちやつてるの?! きもいから早くもとの姿に戻つてよー!」

「ふうん? 確かに見た目はアレだけれどなかなか面白い技ね」

「え、リリナ?」

「何かしらシルウィ姉?」

真顔で聞き返してくる義妹にシルウィは言葉を失つた。

芋虫人面アールを気持ち悪いと感じる自分の感性が

おかしいのかと一瞬不安になったが、よく考えなくても自分の感性は間違ひなく正しかった。キモい、キモすぎる。これでは小さな子供は一生もののトラウマになつてしまふだろう。それくらい見てはいけない冒険流ぼうけんりゅうの姿だった。

「うむ。よろしい。じゃあ戻る」

若干傷ついた声音でそう言うアールは触手のような形態からいつもの大男の姿へと戻つた。シルウィが首を上げて仰ぎ見るほどの偉丈夫である。これで本人は魔術師を名乗っているのだからやつぱりおかしい。

「こんなに近くに潜んでいたなんてね」

リリナが顕現したアールと岩にできた罅とを見比べてそう言った。

「捜索が始まった時はさすがの僕もちよつとびびつたぞ。しかし見つからなくてよかつたな。やはり僕は天才だったということだ」

「でももうちよつと離れた位置に隠れてるべきだったんじゃない? なにもそんな至距離に隠れなくてもさ……。つて、あ! まさかアール君、さっきの女の

子たちのパンツ見て鼻の下伸ばしてたんじゃないよね!？」

「……………。そんなことはない」

「……アール君？」

「アール君？」

「すまぬ。出来心だったのだ。ちなみに隊長と呼ばれていた女は白、エルフはピンクのエロいレースだった。個人的にはぷりぷりの張りのある尻をしていた隊長殿のほうが好みたな。エルフもむちむちで素晴らしかったがやはり若いほうが僕は好きだ」

「アール君サイテー」

「今夜のご飯に嫌いな香草たくさん使ってあげるわ。覚悟しときなさい変態」

「口は禍わざわいのもつであつたか……。しかしリリナはちよろいからちゃんと謝れば甘やかしてくれると僕は信じているぞ」

「誰がちよろいのよ。ぶつ飛ばすわよ!」

「冗談はここまでにして今日の修業のおさらいといこうか」

「あ、今話をすり替えたね」

「していない。修業のおさらいをする!」

「その前にシルウィ姉と私がお説教しますからそこに正座しなさい」

「……ちいつ。くそ、これだから勘のいいガキは嫌いなのだ!」

「この人ほんとサイテーすぎるよ!」

地下空洞に少女二人のお説教する声が続々と響き渡る。時折情けない声音で返答する性魔術師といい、空間にはもはや先ほどまでの戦闘の残り香すらない。

この日アールが解放されたのは、それから一時間後のことだった。

## 夜這い

宿の廊下にて寢室の二人が寝静まったのを確認し、アールはゆつくりと身を起こした。

時は来た。

ターゲットはずいぶん疲れている様子だったし、滅多なことでは起きまい。

やるなら今夜しかない。

彼は部屋の扉の鍵穴に細くした水銀の針を差し込む。鍵穴の中のギミック——上からおりてきている鉄芯を器用に押し上げ、彼は別の水銀の針で鍵を回した。

カチリと軽い音がして鍵が開く。

「ククク……、はあ、はあ……」

自身の息が荒い。

今から少女の寢室に忍び込んで悪戯をするのだ。

途中で彼女が目覚めないように気を付けなければいけない——そのギリギリのスリルが胸をいたく興奮させる。

キィ……とわずかな音を残してアールは部屋に侵入する。

中に満ちるのは女の子の部屋特有の甘い香りと少女たちの密やかな寢息たちだ。

二つの藁のベッドの上にはそれぞれの少女が眠っている。

向かつて左が金髪エルフのシルウイ。

彼女は体を横向きにして赤ん坊のように丸まっている。シーツは体全体に巻き付けていた。

そして、右が今回の犠牲者——長い黒髪の華奢な美少女リリナだ。

アールは足音を忍ばせてリリナのベッドに近寄っていく。

リリナは仰向けになってお行儀よく眠っていた。

薄桃色のタンクトップに黄色のホットパンツという出で立ち。タオルケットはお腹のところにかけてあった。だから彼女の細く白い肩やホットパンツの下から伸びる長い足が丸見えになっている。

胸は全然ないが、太腿からの足のラインは素晴らし

い。

細いのだが、むっちりとしていて、膝のところできゅつと細くなっている。その下には未発達なふくらはぎのライン。

アールはそつと彼女の少女然とした美脚に顔を近づける。

捧げ持つようにふくらはぎの下に手を入れると、じつとりと汗ばんでいた。室温が高いためだろう。アールは膝からむこう脛までに鼻を擦りつけながら大きく息を吸う。

少女の肌の臭い。

甘酸っぱいリリナの香りがした。

足の裏の臭いも嗅いでいく。

たくさん汗をかいたはずなのにあまり臭いはしない。

ほぼ無臭だ。

少し残念に思いながらも足の指の間に自身の手の指を噛み合わせていく。

じつとりとしたリリナの汗が指の間に染み込んでいく。

この手は三日は洗わない——そう決意して、アールはリリナの足汗の染み込んだ手の臭いをすうううつと音を立てて嗅いだ。

臭いを堪能したら、いよいよ彼女の眠るベッドに膝を置いていく。

お行儀よく閉じられた足の両側に。

四つん這いになってのしかかるように。

「はあっ……はあっ……」

今腕の下には綺麗な乙女がこの上なく無防備な姿で眠っているのだ。意図せず息が荒くなってしまふ。

むこう脛から、膝頭、そして細く柔らかそうな白い

太腿に視線は上がっていく。

黄色いホットパンツ。

リリナの尻肉は薄い。

むっちりしているが実は薄いのだ。

だから尻肉が横に漏れて出るということはない。

綺麗な腰、綺麗な肉のない鼠蹊部をしている。

しかしややモリマン気味だから黄色いパンツのデリ

ケートゾーンはわずかに盛り上がっている。しかし当

然男の股間のように盛り上がってはいない。

彼女のそこにはなにも付いていないのだ。

おマ○コが——穴があるだけなのだ。

目を凝らすと黄色いホットパンツの股間部分は、彼女のI字ラインに沿って凹んでいた。

おマ○コの中に衣服が食い込んでいる——。

臭いを嗅ぎたい。

頬を擦りつけてどんな感触がするのか確かめたい。

黄色い布地とその下の白いパンティを横にずらして、その下の媚肉をむちゃくちゃに舐めまわしたい。

しかしここは我慢だ。

何事にも順序というものがある。

荒い呼吸を落ち着けながら彼女の股間から一気に顔まで這い上がる。

まるで魅惑の未発達ボディから視線を逸らすように。

両手を無造作にばらついた少女の艶やかな黒髪の内側についた。

リリナは安らかな顔で眠っていた。

切れ長のつり目も閉じられ、長いまつげが瞼の下に

壁を作っている。

おでこはつるりとして白い。そこに切りそろえられていた彼女の前髪が汗で張り付いていた。

整えられた眉毛は名匠が筆をさつと横に流したよう。少し濃い目の眉頭は險が取れて上がっている。眉尻は細く斜め下に伸びていた。

眉の下は、東洋風の顔立ちなのに彫りが深い。

閉じられた二重瞼は人形のように可愛らしかった。

額の上——髪が生え際に鼻を近づける。

リリナの髪の臭いがした。

彼女の髪の臭いは甘ったるい。桃のような香りなのだ。

右に生え際をなぞっていくと形のいい耳に辿りつく。指を這わせると耳の裏は脂でぬめりとしていた。

臭いは——甘い匂いに耳垢の臭いが混ざっている。

乾いた感じの甘い香りだ。

視界を彼女の美しい顔に戻す。

鼻梁びりょうは高く、脂は浮いていない。毛穴も小さく目立っていない。

アールはリリナの鼻に自分の鼻を近づけた。

「すう……、すう……」

リリナの鼻息の音だ。

本人の平時の性格を表しているように控え目である。

その熱く湿った息を、思いつきり吸い込む。

甘くはない。

湿った臭い。

唾液ではなく——リリナが咳をしたときに吐息から

香る臭いに似ている。

この湿った空気は、リリナの体を循環してまた外に出てきたものだ。

それを今再度吸い込むことで彼女の空気を己の中に取り込んでいることになる。

言いしれない一体感が体を満たした。

さらに視線を下へずらす。

鼻の下には人中と呼ばれる縦の溝がある。

アールはそこに人差し指を当てる。

ぷつくりとしていてさらりとしている。産毛の感触はない。

普段向き合っている時はこの窪みを意識しないが、こうして触れてみるときちんと彼女にも窪みがあるのだと実感できた。

指を下に滑らせるとついに唇に辿りつく。

そこは赤と桜が混ざった色をしていても肉が薄い。

唇の形が上品なのだ。

しかし小さいサクランボのような口かと言うとそうではなく、それなりに横に広い。

唇は完全に閉じられていて、端からは唾液が光っていた。

彼女が唾を嚥下することはあまりない。

寝ているとき特有の唾液量の低下。

しかし生来唾液の量が多い彼女はそれでも口の中から唾液が溢れてしまうのだ。

舌を伸ばして少女の口の端を扶る。

唾液を舌先で掬い取る。

舌の先に乗せて、舌の上に転がし、自身の口の中へ。口内に他人の唾液の臭いが満ちた。



独特な臭いがあるが、甘い——リリナの唾液だ。  
逆三角形の顎のラインに頬を擦りつける。

骨の感触。同時にもちもちの肌の感触だ。

そのまま首下の髪に鼻を埋めた。

桃のような香りが一杯に鼻に満ちる。

水浴びをしていないから、これはリリナの体臭だ。

インキュバスの娘の臭いはこんなにも甘いと言うのか。

アールは髪から首筋に鼻の位置を動かしながら臭いを嗅ぎ続ける。

彼女の白く細い首筋には両側に筋肉の筋が浮いている。

胸鎖乳突筋だ。

首の脂肪が少ないから。

それがとても健康的に見える。

実際彼女は健康な十五歳の女の子だ。

暗い部屋の中で、彼女の首筋は青白く発光している

ように見えた。

筋肉を辿っていけば、そこには鎖骨がある。

二つの鎖骨はやはりくつきりと浮いている。

しかし骨と皮だけという印象はなく、白い柔肌に骨が浮いているといった趣だ。

リリナの体温を感じる。

たまらず鎖骨にむしゃぶりついた。

硬い。

柔らかい。

すべすべしている。

硬い。

柔らかい。

硬い——。

ごじゃ混ぜになった感覚が舌の上に広がった。

いい匂いのする鎖骨。

いつまでも嗅いでいたい鎖骨。

しかし、当然それだけでは終わらない。

アールはついにリリナの性的な部分に手を伸ばして

いく。

まずは——薄い胸だ。

彼女のタンクトップに手を伸ばす。

胸の膨らみはほとんど感じられないが、タンクトッ

プの下は今どのようなになっているのか。

「んう……」

アールの指が止まった。

リリナが声を上げたのだ。

緊張が走る。

もしや彼女は起きてしまったのだろうか？

荒ぶる心臓を押さえつけ、彼女の顔を見つめる。

リリナは目を閉じていた。

桜色に艶めく唇がもごもごと動かされ、くちよ……

と唾液の音が響いた。

しばらく観察していても、唾液の量は増えた感じが

しない。

また彼女は深い眠りについたので。

そのことを確認したアールは停止させていた息をぶ

はっと吐いた。

よかった、気付かれなかった——そのように安堵す

るのも睡眠の楽しいところである。

アールは指を再びリリナの肩の布地に伸ばす。

指は震えていた。

緊張に汗ばんでいる。

これではせつかく染み込ませたりリリナの足指の汗も流れ落ちてしまうかもしれない。

「……………」

緊張の一瞬だ。

その小さな胸を隠す布を、いよいよ横にどける。

タンクトップの肩布が——しゅるりと内側に寄った。

起伏の乏しい青白い胸。下乳の部分が盛り上がって

いることを示すようにわずかに陰を作っていた。その

青い陰の上には、白い肌とあまり色が変わらないよう

に見える薄い桃色の円があった。中央の突起は高さ五

ミリくらい。とても小さかった。

「んう……っ！」

違和感を覚えたのかりリリナが身もだえする。

彼女の細い右腕が脇腹にパンと当たる。

腕は一旦脇腹の筋肉に当たって跳ね返り、そのあと

アールの体を避けるようにしてリリナの細いお腹の上

に置かれた。

いきなりの強襲にタンクトップを押さえていた手を

放してしまった。

細い布地はへししゃげながらもとの位置に戻っていく。  
薄桃色の乳首を隠すように動くが、それも途中で止まった。

左の胸は桃色の乳輪が露出する程度。

右は乳首が布の横からこぼれて見えている。

見えている右の胸に左手を当てる。

柔らかい。

羽毛の入った袋よりもはるかに柔らかい。

しかし柔らかい乳肉の層はすぐに終わりを告げ、その下の硬い肋骨の感触が指に当たった。

白い部分の乳肉と、乳輪のところの肉は柔らかさが異なっている。

乳輪の部分は弾力が皆無で中になにも詰まっていな  
いような感覚だった。

鼻を近づけるとスモモの香り。

匂いは腋から香ってくる。

アールは左手の親指でリリナの右の乳首を弄りながら、左腕をどかして左の腋の下を露出させた。むあつ

と濃い果物の香り。

綺麗に腋毛の剃られたそこに、アールは鼻を近づける。

つーんと鼻に来る。

臭いの薄い彼女もここは臭う。

アールは舌を這わせて腋の下を舐めまわした。

もちもちのすべすべ。少し剃り残しのチクチク感。

腋の奥には硬い筋肉の感触。

左腋を舐めながら彼女の右乳首を親指でなぶる。

親指の腹で押し広げるように弾力のない肉を伸ばすと頂点の突起まで一緒に潰れた。

「ん……あ……」

リリナが吐息を漏らす。

ここ最近性魔術を使って『淫夢』を見せていたこともあって感度は良好だ。

今夜は魔術は使っていないが——、彼女は今どんな夢を見ているのだろう。

乳首を弄られる夢だろうか。

だとしたらとてもエッチでいけない娘だ……。

ぶつくりと盛り上がった乳輪が乳首と一体化し始める。彼女の胸は弄っているとどういうわけかこうなってくる。ぶにぶにの乳輪の肉を親指の先で細かく刺激していく。

擦るように。

弾くように。

時に円を描き、乳首の部分を押るように中に押し込んで。

「あ……、ふうう……」

涎に濡れたリリナの桜色の唇が半開きになる。吸い込まれた息は鼻から抜けていく。

アールは腋の下を舐めていた口をいよいよ左胸へ持つていく。

ぞわりと粟立った左胸の白い肌をねっとり舐めあげ、舌先を高速で動かして乳首をこねくり回す。

スモモの香りいっぱい包まれながら少女の体を弄り続ける。

アールは残った左腕でリリナの太腿を撫でまわした。ここは汗で少しぬめっている。

しかし、もちもちの感触だった。

左乳首を舐めながら視線を上に向けると、頬を染め、口を半開きにしたリリナが依然として安らかな寝息を立てている。

彼女の意識はない。

だけど、知らないうちに体は勝手にエッチな反応をしているのだ。

普段とても女性らしくて、見た目も清楚な女の子である彼女も一匹の雌だということだ。

右の乳首を弄る指に人差し指を加える。

親指とで摘まむようにして揉み、きゅつと上に引く張った。

「あっ……」

小さな喘ぎ声。

ともすれば聞き逃してしまいそうなか細いその声には、明らかに快楽の吐息が混じっていた。

感じている。

眠っていないながら、リリナは気持ちよくなってしまう。

擦り合わされる赤く色づいた膝頭。

クチ……とりリナのホットパンツの下から水音がした。  
た。

アールは右乳首をじんわりとひねり。

左の乳首を口で挟んで引つ張った。

少女の未成熟な胸が、乳首の部分だけ盛り上がる。

口の中にちよつとだけ露出した乳首の頭は舌先でくすぐってやる。

リリナは汗を滲ませながら、はあー、はあーと深い息を繰り返していた。

彼女の東方の淑女然とした黒い眉はより上げられ、

長いまつげはふるふると震えている。

舌先に塩の味が混ざり始めた。

発汗が激しくなってきたのだ。

「んあ……あ……」

鼻にかかった声。

リリナの普段の高いソプラノからは想像ができないほどくぐもっている。

低い声は体に余裕がないから出したのだろうか。

だとすると、彼女は今、どんな夢を見ているのだろうか。

「んふう……ちゅ……」

彼女の口が大きなリップ音を立てる。

唇の形が、なにかを啜えるように控え目に開かれ

——「ちゅば……」と控え目に舌が動いたような気がした。

もしかしたら夢の中でチンポを啜えているのかもしれない。

胸を弄られて、感じながらチンポを舐める夢。

「あ……ん……、ちゅ……」

親指の腹に硬い突起が当たる。

舌の腹にも硬いものが当たった。

リリナの乳首が勃起したのだ。

乳輪が膨れ上がり——、さらにその中央の乳首が勃起する。

彼女の腋の下から甘い香りが流れ出る。

汗の臭いとは違う——男を誘う女の香りだった。

アールは乳首から左手と口を離すと下にずれていく。

タオルケットのかけられたお腹を撫でまわしながら細い腰へ。

生地が薄いせいでリリナの体の輪郭がよく分かる。

胸周辺の起伏のない様子とは違って、腰はちゃんとくびれている。幼児体型ではないのはこうして腰がくびれていて、お尻が薄いながらも丸みを帯びているからだ。

あとは普段彼女が纏っている凜とした聡明そうな雰囲気。

隙どな一つもない彼女だが、夜寝るときは隙だらけだ。

アールは荒い息をしながらリリナの太腿に頬を擦りつける。

汗ばんでいる。そして——ここも桃の香りがする。

彼女の左太腿から右を見ると、そこにはドアップのホットパンツに包まれた鼠蹊部そけいぶがあった。

先ほど水音がしていたが、濡れているようには見えない。

股間の部分は寄せられたマ○コの肉で柔らかそうに

膨らんでいた。

内腿を撫でさすり——、リリナのI字をホットパンツの上からなぞる。

彼女はかなりの上げパン派らしい。

ホットパンツも腰の上まできちんと上げているのだ。そのせいで股間部分はびちびちになっっている。

指で押せば、彼女の凹んだ溝の形がうつすらと浮かび上がるほどに。

こしゅこしゅとリリナの股間の部分を右の指でなぞる。

一方で左手は、ゆつくりとホットパンツの横からパントリーの下、生の肌へと侵入していく。

しかしそこで問題が生じた。

リリナがあまりにも上にホットパンツを上げすぎているせいで、指が肝心の股間部分に入り込めないのがある。無理やりねじ込んでも、これでは満足に動かせない。

結果、アールの左の人差し指はマ○コの上の綺麗に剃られた下腹部を撫でるとどまった。

ホットパンツを破くわけにもいかないから、こうなつたら脱がせるしかない。

アールはホットパンツの紐をシュッと解くと、リリナのお腹に手を当てた。

「んっ……！」

リリナが身じろぎする。

一瞬心臓が止まりかけた。

しかしすぐに彼女は寝息を立て始める。

……まずいかもしれない。

慎重にやらねば起こしてしまいそうだ。

リリナのお腹——ホットパンツに力を入れる。

彼女の白い下腹部がぐつと露わになる。

しかし、彼女の丸い尻が引つかかって、尻の下の布地がずれない。

関係ない、前だけずらせば——と思ったが、布はクリトリスの上辺りで止まってしまった。彼女の膣があるのはもつと下の奥である。ここからでは全然届かない。

「んんう！ んんっ、うっ！」

攻めあぐねているとリリナが暴れた。

硬直するアールの目の前で、リリナの体がダイナミックに盛り上がる。

腕が動いて、体が半身になり。

やがて彼女はお尻を向ける形——うつぶせになった。

寝返りを打ったのだ。

アールは細く息を吐いた。

危なかった。

起きてしまったのかと思った。

しかし彼女は眠っている。

しかも——幸いにも尻を向けてくれた。

これで先ほどのように尻にホットパンツが引つかかることはあるまい。

アールは再びホットパンツの口に両手をかけた。

そして、するりとパンツは下に脱げる。

あっけなかつた。

これほどまで肝を冷やしたのに、脱げるときは一瞬だ。

アールの前には、尻タブのすぐ下までホットパンツ

とパンティをずらしたリリナの白い尻があつた。ずり下げられている部分の隙間から微妙にリリナの媚肉が見える。黒い陰になつていてもっと目を近づけないと完全には分からないが、あれはたぶん膣口だ。

もう我慢ならなかつた。

アールは指での愛撫も忘れてリリナの尻タブの間のその部分にかぶりついた。

一瞬、起きるか——と思つた。

しかし、口を押し付けた瞬間も反射が起こらない。

生体魔術的——学術的に考えて、眠っている。

起きない。

二つの尻タブとホットパンツとに囲まれた暗い部分にしゃぶりついてても、リリナは起きない。

アールは思う存分その味を舌で味わい始めた。

鼻の先にはケツの穴。

その下の内部に隠れたびらびらを舌でぐちよぐちよに撫でまわす。

つるつるしている。

貝の身のようにだ。

奥に行くとりリナの体温がじかに伝わつてきて熱くなる。

小便の臭いがきついが、舐めればそれは緩和された。塩辛さはあまり感じない。

しかし確かに味はある。

「あ……ん……」

リリナがゆつたりとした息を吐いているのが聞こえる。

アールは尻タブを掴むと左右に押し広げた。

ピンクの肉が見える。メラニン色素の影響が少ないのか。いやらしいケツの溝だ。

尻タブを広げると膣口も一緒に開いた。

ニチャア……と粘つくような音が鳴つた。

夢中で膣をしゃぶる。

少女の小陰唇をしゃぶる。頬に大陰唇のぷにぷにが当たっている。

舌先を硬く細くして膣の中に差し込む。

「んあ……」

くぐもつた低い声。





ふと視線を下にずらすと、小陰唇の下にびんびんに勃起したクリトリスが見えた。

前に見たときより皮から露出している。

アールは口全体を尻タブの下に押し付けながら、左手の指でクリトリスを刺激した。

クチ、クチ、クチ……。グチャ。ニチャア……。ピ

チヨ……。

そんないやらしい音が、清楚な黒髪の美少女のマ○コから響き出る。

鼻の中は磯の香りでいっぱいだ。

右手を尻穴に持っていく。

アナルに人差し指を突っ込んで内部の壁を撫でまわす。

舌先に粘性の高い液体が混じり始めた。

白い愛液。

クリトリスはふるふる震えている。

「――」

アールは無言でストラックスを脱ぎ捨てると、ペニスを尻タブの間に差し入れる。

リリナの濡れた小陰唇がペニスの天井に擦れて気持ちがいい。

アールは少女の体を横に向け、華奢な背中を抱きしめながら腰を前後させた。

膣と両腿にペニスが擦り上げられる。

「あ、あ、ん……」

リリナが眉根を寄せて口を開いた。

アールは開けられた少女の口の中に自身の鼻を突っ込み、息を貪る。

右手はクリトリスに。

左手は未発達な胸に。

ペニスは――素股からずるりとずれてリリナの膣に呑み込まれた。

一瞬だった。

リリナの膣口は小柄な体格にしては大きめだ。

アールの剛直も濡れていれば呑み込める。

「あ、あ、あつ……」

おそろく、夢の中で快楽を味わっているのだろう。リリナが小さな声で喘ぎ始める。

リリナの唾で鼻がべたべたになる。

濡れたリリナの口内は、興奮した獣の臭いで満ちていた。

獣臭い不快な香り。

しかし、男にはそれがとても甘く感じられる。

膣内の壁が絡みつく。

精液を搾り取るように動き回ってくる。

腕に力を入れれば折れてしまいそうな少女の体は、快楽に打ち震えていた。

膣が締まる。

信じられない強さでペニスを根元から締め上げてくる。

又チヨオ……グチヨオ……と粘っこい音と共に、アールの長い一物は、リリナの中に出たり入ったりしている。

クリの皮を剥いていた人差し指にはわずかに白い恥垢が。

それに鼻を近づけると、アンモニアの臭いがした。

リリナのアンモニアの臭いだ。

「んう……、んう……、んんう」

リリナの喉が甘えるようになっていた。

アールは口を広げてリリナと舌を絡めた。

彼女の舌が蠢く。

おそろく無意識のうちに。

「ちゅ……、ちゅう……、ちゅっ、ちゅっ……んふう」

リリナの体に取り付くようにまとわりつく。

膣とクリを、そして口内をぐちよぐちよにかきまわす。

腰を打ち付けながら強く唇を吸うと、呼吸が苦しくなったのかりリリナの全身から汗がにじみ出た。

彼女の汗——体液がアールの衣服に浸透し、体中に染みついていく。

鼻の中はリリナの唾液と汗の臭いでいっぱいだ。

そしてペニスは彼女の中に納まったまま。

リリナの強引に射精させるような膣内は寝ていても容赦はしてくれない。

グチャグチャと水音が高くなる。

「あつ、あつ、あう、う、あ」

突くたびに反射的にリリナの声が漏れている。

亀頭冠に膣肉が絡みつく。

膣は敏感なそこを押しつぶすように大きく動いた。

たまらずイキそうになる。

尻穴にも指を潜り込ませる。

アナルはグププ……と空気を出すと太い人差し指と

中指とを悠々と呑み込んでいった。

「んああ……」

リリナがアールの口内で熱い息を吐く。

頬は気持ちよさそうに潮している。

アナルをぐるりと指で掻き回すと脂でぬめっていた。

亀頭を包む膣壁が狭まる。

腰が抜けなくなる。

挿らえられたペニスはどうもうねとうねる壁に全体を

包むように揉まれた。

湿った力強い感覚。

「ん……っ」

リリナが体を痙攣させた。

チンポの形にマ○コを変形させ、彼女はイってしま

ったのである。

少女は胎児のように足を丸めた。

快楽に耐えるように全身の筋肉を硬直させる。

「うっ、出るっ！」

びゅく、びゅるるるるる！　びゅっ、びゅうう

う！！！！

淫魔の膣イキの締め付けは問答無用で男に射精させ

る。  
たまらずアールはリリナの中に精を解き放った。

「あん……」

リリナは切なそうな声を上げた。

アールは彼女を起こさないようにそつと体を離れた。

支えを失った少女の体は、こてんともとの仰向けに

倒れる。

まるで最初と同じような格好だ。

しかし、太腿の辺りまでずらされたホットパンツと

勃起したクリトリスは事後であることを確実に教えて

くれていた。

アールはベッドから身を起こして立ち上がる。

リリナのしなやかな両足は少し開かれていて。ホットパンツの向こうに桃色の膣が露出していた。ピンクの媚肉には青く太い糸のような穴。その秘裂からは、睡眠姦されたことを証明する白い液体が、ごぼりと溢れ出ているのだった。

※ ※

翌朝、リリナは夜明けと共に目を覚ました。

寝ぼけ眼で上半身を起こすと、何故だかパンティが変な感じになっていることに気が付いた。

艶やかな黒髪を撫でつけながら、彼女は首を傾げる。——一旦愛液で濡れて、それから乾いたときみたいな感じがするわ。

しかしエッチな夢を見たあとなんかはよく濡れているし、特別変なことではないか。

エッチな夢。

そう言えば、昨夜はすごかった。

アールに耳元で「愛している」と囁かれながら執拗

にアソコをなぶられる夢を見た——と思う。

だめ、もうやめて——と何度も懇願しながらも、エッチな気分が全然収まらなくて、嫌々犯されている振りをしながら何度もイッていた。

リリナは半分瞳を上に向け、唇を開けたような——アへ顔に近い顔になりつつ、そろそろと右手をホットパンツの中に伸ばす。

だけど、すぐにやめた。

一時の快楽を得られる術はもう嫌と言うほど知っているが、あとに待っているのは虚しさだけなのである。そう考えるとここでしてしまふのは、あまりいい考えではなかった。

「ん~~~~！ 起きるか！」

気持ち切り替えるように少女は元気よくそう口にする。

隣のベッドを見ると、まだシルウィイが幸せそうにやすやすと眠っている。

朝ごはんができるまでは起こさないようにしておいてあげよう。

リリナはベッドから下りると手荷物の中から土くれの入った袋を取り出した。

土魔術でコップを作り、水魔術で水を作ってゴクゴクと飲み干す。

「ふう……あ、そうだ」

リリナは飲み干したあとのコップに水魔術と熱魔術でシャーベットを盛り付けた。

ついでにスプーンも作っておく。

間接キスになるかもしれないので唇が触れた部分は覆い隠しておく。

リリナとしてはとてもエッチな気分なので間接キスをしたかったが、そんなことをするのははしたないので絶対しない。

いつも清楚で綺麗な女の子でいたいのだ。

性欲は理性によって別の方向のエネルギーへと変えられる。

本能のみのインキュバスの娘とは違うのである。

リリナはシャーベットを持ってドアを開けて外へ出た。

「む……、リリナか」

外には昨日の夜最後に見たときと同じ格好でアールがうずくまっていた。

今朝はどういうわけか少し眠そうだ。

いや、昨日の朝もそうだった気がする。

リリナは少し心配になった。

廊下なんかで寝ているから体を壊してしまったのかもしれないと思ったのだ。

「おはよ、アール」

「うむ、おはよう」

「大丈夫？ 顔色悪いわよ」

リリナは髪を耳の後ろに掻きあげながら屈み込んだ。それからアールの額に白い指を這わせる。

「なにをしている？」

「熱を測っているの。……平熱みたいね。でもとつても辛そうよ。どこか痛いところとかない？」

「大丈夫だ、問題ない」

「そう……？ 心配だわ」

リリナはアールの額から首筋に指を滑らせる。

脈拍も正常のようだ。

ただたくさん汗をかいているようだ。

廊下は部屋よりも暑いからそのせいだろう。

リリナはアールにシャーベットの入ったコップを渡す。

「よかつたら食べて」

「これは重畳ちゆうじやう。いただくとしよう」

「ねえ、アール。無理しないでね」

性欲が増しているせいか、リリナはいつも以上にアールとの会話を続けてしまう。

でも心配なのは本当だ。

彼には——ずっと元気でいてもらいたい。

アールは短く、

「分かっている」

とだけ言った。

「本当に分かっているのかしら？ ……それじゃ、私は朝ごはん作るから」

リリナはさらりと黒髪を揺らしながら立ち上がる。

青年に一日背を向けて——それから振り返って可憐

な笑みを浮かべる。

「アール」

「……………？」

「今日も、よろしくね！」

彼女は元氣よくそれだけ言うのと部屋に戻っていった。持て余した性欲が活力に変わっていく。

リリナはとても生き活きとしていた。

肌も心なしか艶やかになっていく——ような気がする。

処女を失い、アナルを開発されたとは言え、彼女の心はいつまでも純真で高潔だ。

きつと、理性のある状態では性欲とはもつとも遠いところにある存在だったのだろう。

だがしかし、それも過去の話だ。

「あ……、垂れてきちゃった……」

部屋に戻ったリリナはホットパンツの裾から滴った愛液に気付いて赤面する。

先ほど尊敬する男の体に触れてしまったのがよくなかったらしい。

リリナは自分でも気付かず淫らな表情を浮かべながら——、そつとベッドのシーツで、白い愛液を拭うのだった。



## 緋剣、牙を剥く

——まるで大嵐の目だわ！

リリナは背後に跳び退りながら歯噛みした。

そびえ立つような白灰色の重騎士の魔斧まかはさながら暴風の化身だった。

大きな白刃にそれ以外はすべて禍々しい紫色。

明らかに尋常の武器でないそれは、敵を前に早くも本性を現していた。

斧の周りに風が渦巻いている。

つむじ風のような鋭利な風音を響かせながら魔斧はリリナのほうへと豪快に振り下ろされる。

少女はそれを横に跳んで避ける。

完璧に避けた。

その横を『白』色の風を纏った衝撃波が岩の床を深く削り取りながら駆け抜けていく。

まるでヒュドラが削岩しているときのような轟音。

リリナの視界に小石がパラパラと散る。

衝撃波は強力だ。

完璧に避けたはずなのに、その二次的な余波だけでリリナの肩の布が消し飛んだ。

——かすつたら死ぬ！

斧に触れれば粉碎。

白い衝撃波を受ければ八つ裂き。

その二次的な余波を受けても体に甚大な被害を負う。これを嵐と呼ぼすになんと呼ぶ。

重騎士の乱舞は止まらない。

巨体に似合わず俊敏な動作で魔法の斧を振り回しながらリリナに追いつがる。

重騎士の兜から低い呪文が漏れ出ている。

古い魔法の呪文だ。

それはロストマジックと呼ばれるものか。

重騎士の『呪』により彼の白灰色の鎧は軟体動物のようにうねる。

鉄の鎧のせいで本来不可能なはずの柔らかくにして繊細な動きを、大男の騎士は古の魔術により可能にして

いた。

白い岩の城塞が迫るようだ。

巨体はリリナの小さな体を呑み込まんとするように押し寄せる。

踏み込んだ強靱な右足は岩の床を砕き。

遅れて背中より半円を描きながら振り下ろされる魔

斧は、『白』色の濃密な魔力に包まれ、獣の唸り声のような音を上げながら飛来する。

受けきれない。

いなしきれない。

いかに妖刀であろうと、あれを正面から受けたら使

い手であるリリナが弾け飛ぶ。

リリナは転がるようにして巨漢の大斧を避けながら

額に汗を滲ませた。

——回避主体の軽装備でよかった。

あれはおそらく竜殺しの一種だ。

巨漢の英傑は生前あの斧によつて本来人には殺傷不可能なはずの幻想種を粉碎してきたのだらう。

グリフィン、シーサーペント、そしてドラゴン。

いずれも巨体を誇る天災とも言うべき魔獣だ。

しかしあの魔斧の前では塵芥ちりかたも同じであろう。

リリナの右隣を通過していく白い風は唸りを上げながら、この祈りの間の岩の壁に直撃した。

ガリガリガリガリ！——そんな耳障りな音のあと、

空間を囲っていた壁が数十メートル抉れた。

金城鉄壁の分厚い岩盤がまるで紙細工のようだ。

白亜の重騎士の円舞は止まらない。

鍛えに鍛え上げられた斬撃の舞は岩の足場を破壊し

ながらなおもリリナに迫り来る。

攻撃する隙がない。

攻撃すれば嵐に吞まれる。

烈風に巻き込まれ、ずたずたにされる。

どんな戦士もあれの前では形無し。

小動物のようにただ逃げ惑うことしかできない。

——

重騎士の低い呪言は続く。

それは神への賛歌であった。

かつて彼はこれを詠唱しながら立ちふさがる敵を破

壊してきたのだろうか。

彼の流麗な体捌きは魔力の籠もった言葉と同じく決して途切れることはない。

——くっ……！！ このままじゃ……！！

リリナの心が焦燥感に駆られていく。

避けるのに手一杯。

むしろ今まで避けられていることすら奇跡。

右に避けるか左に避けるか。

その二分の一の選択を既に十回はしていた。

すべて勘で成功していたからいいものを、もし一つ

でも外していたら今頃肉塊だ。

リリナにはエルフのような第六感はない。

だからこの幸運は長続きしない。

シルウィならば百パーセント成功させられる回避を、

彼女は五十パーセントに賭けるしかない。

——また来た……！！

白い重騎士の手元がぶれる。

斧の軌道が読めない。

優にリリナの反応速度を上回っている。

かつてまったく歯が立たなかった黄昏の森の錬金術

師——クイーン・モスキートの主以上の素早さで、さ

らにあれの数倍は強力な一撃がまたやってくる！

重騎士の鉄の軍靴ぐんかが鈍い音を立てる。

巨体が宙に浮く。

岩盤のような盾を前に構え、中空より隕石のように

飛来してくる。

盾にかすってはいけない。

ひき肉にされてしまう。

避けないといけない。

避けられなくても絶対に避けないといけない。

じゃないと死ぬ。

——速く！ もっと速く！ もっともつと加速し

て！

リリナは自身の肉体に鞭打った。

今まで出したことのないような超スピードで跳ぶ。

跳ぶ。

跳ぶ。

跳ぶ。

雷霆よりも速く。

光よりも速く。

体を限界まで小さくして。

迫り来る暴風から身を守る。

巨岩が着弾する。

リリナが一瞬前までいた空間が捻じれた。

岩の床が十メートルは抉れた。

衝撃ははるかに。

弾けた岩盤は礫となつてリリナの皮膚を引き裂いて

いく。

「——っ」

痛い。

裂かれた皮膚が痛む。

しかし怯んではいけない。

歩みを止めてはいけない。

速く、もっと速く。

——軌道を読まないで。先読みして最適解を見つけ

ないと。

リリナは黒曜のような瞳を鋭くする。

とび色の髪の魔術師ならどうするか。

あの理に至った青年ならどのように動くか。

リリナの脳裏に焼き付いた青年の動きが幻影となつ

て視界の中を動き始める。

どうすれば生き残れるのか。

あの暴風を避けきるにはどのように動けばよいのか。

右に跳んだとして、その次はどのように避けるか。

チェスで敵の三手先、四手先を読むような作業。

リリナの戦略眼は精いつばい重騎士の動きを先読み

する。

「——っ！——！！」

重騎士の詠唱が変化した。

白の鎧は形状の変化をやめ、岩の盾が前面に押し出

される。

「——っ!?!」

敵の動きが止まった。

唐突に止まった動きにリリナは目を丸くする。

——なにが起きたの!?

「——っ！——！！」

重騎士の詠唱は淀みがない。

そこに殺傷の意思はない。

低い朗々とした言葉には慈愛の意味が込められていた。

そこでリリナは唐突に気付いた。

重騎士から出た『白』の魔力が後方に流れていつている。

後方——魔力の向かう先は、アールと戦っている長身瘦躯の騎士だった。

「——っ！」

リリナは目を見開く。

長身瘦躯の騎士の膝にはアールの放った槍が突き立っていた。

さすがは竜を単独討伐した英雄と言うべきか。

アールは一切の魔術を使わず、長身瘦躯の英傑を上回っていたのだ。

足に傷を負った敵は、長大な剣に白い光を宿しながら魔術師を牽制している。

そこに重騎士の治癒魔術が飛んでいたのだ。

重騎士が嵐のような攻めを止めたのは仲間に治癒を飛ばすため。

リリナが怯んでいる隙を狙った熟練の業であった。

長身瘦躯の膝の槍が音を立てて岩の床に転がる。膝が治癒したのだ。

——私が足止めできなかったせいだ！

リリナは唇を噛みしめて遅ればせながら突撃する。

しかし巖のような敵の盾は妖刀の斬撃をも軽々と弾き返した。

重騎士が再び魔斧を構える。

攻守逆転。

短い攻撃の機会はこれで終わった。

またこのあとはあの嵐のような乱舞がやってくる。

——どうする？

英雄たちの戦場で、明らかに実力の足りていないリリナは半ば蚊帳の外だった。

少女は右手に握った妖刀に力を込める。

この紅臍べにおぼろにはアンデッドを一撃で葬り去る力がある。これをどうにかしてアールに渡せば状況は改善され

るのではないだろうか？

——だめだ。それじゃ私が本当に無視されてしまう。リリナが曲がりなりにも巨漢の騎士のヘイトを稼ぐことができているのはこの一撃必殺の妖刀があるからなのだ。

これが鍛冶屋で買ったファルシオンになったらどうであろうか。

きつとりリリナの攻撃は重騎士にも、そして長身瘦躯の騎士にも通らないに違いない。

ならば相手はどう動くか。

リリナの存在を無視して黒龍（しやくりゆう）卿一人に襲いかかるだろう。

重騎士が前で攻撃を受け止め。

長身瘦躯がその後ろから熾烈（しちれつ）な攻撃をかける。

今のアールは魔術が使えず、著しく消耗している。攻防一体の陣を敷かれてはさすがに突破できまい。

戦いが始まる前にアールは言った。

『リリナ。共に戦うぞ』

それは最適解だった。

リリナとアールが別々に戦い、敵の阿吽のサポート関係を分断するため。

あの城塞のような重騎士と、攻城兵器のような長剣の騎士を一緒にさせてはいけない——。

彼は勝利への条件を前もって提示していたのである。

——次は、次こそは……！

しかし次はあるのか。

先ほどの一瞬が最後の機会ではなかったのか。

次の重騎士の治癒魔術までまたあの猛攻を受けなくてはいけないのだ。

やるしかない。

やるしか生き残れない。

重騎士の鎧を変化させる詠唱が再開される。

白の魔法鎧はまた肉を持つ生き物のように器用に形を変え始めた。

白いファランクス。

密集した鉄の槍が一挙に押し寄せてくる幻影。

風が渦巻く。

白く、白く。

小さき者をあざ笑うように、強大に、強大に。

白い風の被膜を纏った重騎士はまたもや疾走を開始した。

うねるように体をひねりながら、魔法の斧の斬撃が

飛んでくる。

リリナは跳ぶ。

跳ぶ。

飛翔する。

それは奇跡のような光景だった。

リリナの体はわずかずつ速度を増していた。

少女を包む『黒』の魔力が増大する。

死の危険を前に、彼女の内なる力は覚醒を始めていた。

進化する。

種族の歴史のように、進化の道を辿るように、リリナの体は下級の悪魔のものからさらに上位のモノへと変化を始めていた。

——速く！ もっと速く！

重騎士の暴風は止まらない。

白い風の被膜は烈風となってリリナに突進してくる。

岩が割れる。

風が吠える。

光が悲鳴を上げる。

リリナは勘だけで後方に跳躍した。

一瞬遅れて真横に広がるような衝撃波が重騎士の斧から進った。

左に避けても右に避けても粉碎されていた。

後方に跳んでいなければ死んでいた。

敵はあのような攻撃も可能なのか。

リリナの回避を読んでいたのだ。

斧の斬撃は後ろにしか飛ばぬと思わせておいてから真横に広がるような範囲攻撃。

超常の勘をもつて後ろに跳んでいなければ終わっていた。

——強い……！

リリナは戦慄した。

この重騎士は本当に強い。

アールの強さは人外のそれだが、この騎士の強さは人としての強さを感じさせた。

あくまで人として最高峰まで練り上げた体術、斧術、魔術。

この騎士は間違はなく自力で、生涯を懸けて、『理』に至ったのだ。

魔斧の紫の柄から『白』の魔力が迸る。

旋風のような高い風鳴り。

風が絶叫している。

呪文は明確な殺意を吟じていた。

力を増した悪魔の少女に、重騎士はさらなる力を解放する。

天に吠える。

祈りの間に巨漢の轟咆が鳴り響く。

白い魔力は、白い鎧に収束していく。

彼の盾に竜のような紋章が浮かび上がった。

五本の首を持つ竜の絵。

ヒュドラだ。

彼が信奉する『神』だ。

盾だけでなく、彼の白い鎧にもそれは浮かび上がっていた。

風が渦巻く。

尋常でない魔力が渦巻く。

——なに、あれ……？

竜のハウリングを受けたときのようにリリナは肌を粟立たせる。

重騎士の背後には白い五本首の竜の幻影が見えた。

——なんなのよ、あれ！

リリナは妖刀を手に歯を食いしばる。

敵が何をしたのか分からない。

しかし何かまずいことが起ころうとしているのは分かる。

——死ぬ。

悪魔の勘がそう告げた。

このままでは死ぬと。

ヴァレフォルを前にしたときと同じ感覚。



リリナは戦おのいた。

——あれは、なに……!?!?

そのとき、リリナの手の中にある妖刀がドクンと鼓動した。

『あれは竜痕りゅうこんだ』

あり得ない声があった。

リリナは赤い刀身を見下ろした。

——今、この刀が喋った……?!

しかし刀は答えない。

戦いに集中しろと言うかのように沈黙する。

リリナの脳裏にバチリと『青』の電気が散る。

一瞬、女の幻影が見えた。

自分とそっくりな鳥の濡れ羽色の髪の女。

リリナと同じ顔だが——もっと大人びた女の顔だ。

あるいは十年後、リリナが成長すればこうなるかも

しれないと思われる、美女の顔。

彼女は妖艶な笑みを浮かべた。

性欲が湧き上がってくるような美しくも淫らな顔。

女は最後にこう言った。

『打ち返せ』

——っ!

醒める。

幻影から覚める。

『青』の啓示は終わった。

ゼロの刹那の夢はリリナに状況の打開策を教えてく  
れていた。

——

眼前には依然として竜の幻影を背に纏う岩壁のよう

な重騎士の姿。

彼は勇壮な戦の唄を吟じながら白の魔力を集めてい  
る。

魔法の斧を頭上に掲げて。

空間の風という風を一身に集めて。

——!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

重戦士がおしなく。

嵐のように。

ドラゴンのように。

暗い神殿に紫電が散る。

太い雷電は神殿の天井と岩の床を繋ぐ。

斧を天に掲げて祈る重戦士の周囲に止めどなく鳴り

響く。

風が笑う。

風が泣く。

風が怒る。

重戦士が斧を構えた。

下段。

攻撃を繰り出す構え。

竜の紋章の浮かんだ盾は横へとずらされている。

力を溜めるように重戦士の斧を持つ腕がギチギチと

嫌な音を立てて盛り上がる。

——来る！

直感する。

あの英傑が生前誇った必殺の一撃がやってくる。

重戦士が左足を一步前に出した。

まるで巨人の歩みのように、左足で踏みしめた岩が

胎動する。

重戦士の体を中心に、岩盤に蜘蛛の巣のようなひび

割れが伝播する。

風が吠える。

光が吠える。

リリナは赤い妖刀を正眼に構えた。

「打ち返せ」

幻影の女はそう言った。

あの女が何者かは分からない。

しかし、天才的な剣のセンスを持つリリナは本能的

に悟っていた。

幻影が口にした解答こそが正解であると。

リリナの周囲に「黒」の魔力が渦巻く。

——迎え撃つ。

常人ならば卒倒しかねない選択だ。

白い暴風の前に、リリナは体の内の勇気をすべて集

めて対峙する。

「！！！！！！」

重戦士が吠えた。

古の言葉。

リリナには意味が分からない。

しかし、どういうわけか理解できた。

【崩天戦斧】

重騎士はそう叫んだ。

天を崩す斧。

それが敵の持つ魔斧の名か。

刹那。

限界まで引き絞られたカタパルトのように、重騎士

の剛腕が振るわれた。

押し寄せる。

白い衝撃が風のようにすべてを巻き込みながら肉薄

する。

視界が白く染まった。

お伽話のような光景としか形容できない規模の爆発。

雷が天と地とを繋いだ。

轟音が響く。

リリナだけでなく背後で戦っていたアールと長身瘦

躯の騎士の総身まで音は殴打する。

全身が消し飛ぶ錯覚。

一瞬あとには自分は死んでいるのではないか——そ

う思われた。

重騎士の風の大魔術による一撃は、地面を竜のように走った。

白い多頭竜が罅を開けて突進してくる——。

リリナはそれを真正面から見据えながら、赤い妖刀

に魔力を込めた。

魔力を込められた妖刀は清冽な青い光を周囲に解き

放つ。

——紅隴よ……！

少女は祈るように手の中の運命の魔剣を掲げる。

魔法言語の配列が組み変わった。

【魔術無効】から【魔術反射】へ。

黒い魔力は迫る白い風の斬撃を呑み込むように膨れ上がった。

リリナは大きく振動する赤い魔剣を握る手に力を込

める。

両手でしがみつくように左右にガタガタと揺れる妖

刀を押さえつけた。

振動に妖刀が飛べば我が身が粉碎される。

この刀は命綱だ。

絶対に離してはならない。

「ああああああああああ!!」

リリナは絶叫した。

細い少女の叫びだったが、確かに竜のような吠え声

だった。

黒い魔力が膨れ上がる。

拉ぐひしような敵の斬撃の風が黒く、黒く塗りつぶされ

ていく。

リリナの視界の先で重騎士が振り下ろした魔斧を手

に呆然とこちらを見つめるのに気が付いた。

英雄が哑然としている。

その事実がリリナをさらに高ぶらせた。

妖刀を引き寄せる。

白い衝撃波を青い稲妻に変えて、リリナは妖刀を振

りかぶる。

『今だ』

誰かが笑うように囁いた。

リリナは紅腫を振りかぶった。

刀身から迸る星の誕生のごとき輝き。

緋色の刀は牙を剥むいた。

敵の必殺の一撃をそのままそっくり返す。

こと、超威力の打ち合いにはこの妖刀に勝てるもの

などいない。

「消えろおおおおおお!!!!!!!!」

少女の叫びに妖刀は応える。

敵の重騎士の一撃をすべて呑み込んだ黒い稲妻が、

一直線に彼に走る。

当たれば蒸発。

反則じみた一撃だ。

重騎士の過ちは、早々に勝負を決めてしまおうとし

たことだ。

少女の妖刀の効果を看破できなかった。

大威力の魔術は絶対に使つてはいけなかった。

普通に戦っていればいざれ斧の斬撃に少女は吞まれ

ていただろう。

だが、我慢比べができなかった。

黒龍卿と一対一で戦う同朋を氣遣つてのことだった。



早く羽虫を片付けて加勢に向かわねばならないと焦った。

その焦燥が運命を分けた。

黒い稲妻は重戦士では避けきれない。

巨漢の英傑は、それでも前に盾を構える。

彼は死してなお、生前の戦いの中にいた。

味方を、国を守るために目に映る者すべての盾となることを誓った。

そのために戦に明け暮れた。

そのときの幻影を追って、彼は戦い続けていた。

紡がれる古の呪文。

彼が唱えたのは城塞の魔術。

物理法則を捻じ曲げ、手に持つ竜の紋章の盾を城壁のごとく堅固にする魔術である。

誇り高く。

背後に控える長身瘦躯の同朋を守るように、巨漢の

騎士は黒い稲妻を全身で受け止める。

自慢の盾に罅が入った。

名匠が今わの際きわに彼に託した鎧が砕けた。

かつて最硬を誇った彼の防護が崩される。

巨竜のプレスもかくやという黒い稲妻は、盾の向こうの彼の体を存分に焼き尽くしていく。

「ハイドラ、様……！」

彼の言葉が分かるアールにはこう聞こえた。

忠誠を誓った彼の主君の名だ。

耐える。

彼は耐える。

砕けてはならない。

仲間を守る盾は砕けない。

絶対に。

「……………！！！！！！！！！！」

吠える。

稲妻を払う。

誇りにかけて。

立ちはだかる。

爆音が弾けた。

稲妻が終わった。

重騎士は耐えきった。  
蒸発するはずの稲妻を前に、誇りをかけて耐え抜いた。

かつて大英雄と讃えられた彼だからこそできた業だ。  
耐えきれば勝てる。

不覚は二度取らぬ。

次は油断なく、羽虫をこの斧で押しつぶす。

不死の騎士はいまだ白煙を上げる体に鞭打つ。

斧を構えなければならぬ。

そして敵を引き裂くのだ。

「――」

朗々と紡がれる聖なる言霊。

彼の体は治癒を始める。

巨漢が動きだす。

そのとき、彼の周囲の白煙を破って、妖刀を携えた

少女が眼前に出現した。

※ ※

白煙を破ってリリナは手負いの重騎士に襲いかかる。  
赤い妖刀は死神の鎌だ。

敵は過ちを犯した。

二度は犯さぬ過ちだ。

だからこそ逃してはならない。

この機に粉碎しなければならぬ。

リリナの体が加速する。

ぶれる。

地を這うような接敵から、一転、影が持ちあがるよ

うに、宙空に身を躍らせる。

これより先はない。

ゆえに終わりの太刀を振るおう。

リリナの目が歪む。

体に走る激痛に耐え、少女は返し剣を振るう。

緋剣。

秘剣。

限界まで引き絞った弓のようにリリナの体は反り返

る。

放つは初見殺しの連続剣。

黒龍帝の舞踏剣術——終わりの太刀の一つ。

魔鳥のように空間を踊る彼女は。

一呼吸のうちに、二十の斬撃を繰り出した。

「——っ！」

リリナの秘剣は以前のものとは段違いに進化を遂げていた。

鋭く、重く、速く。

アールによって鍛え上げられ、戦いの中で成長した

リリナは、既にこの秘剣に關しては完成させていた。

まずは三撃。

妖刀の剣先は分裂するように霞む。

初撃。

三回の斬撃をもって初撃。

高速で振るわれた刀に、城塞の英雄は碎けかけの盾

を合わせる。

重い、抉るような三撃だった。

古の益荒男もかくやという斬撃。

重騎士の光のない瞳が驚愕に見開かれる。

少女の天才的な剣のセンスを感じ取ったのだ。

彼が十五のとき、果たしてこの高みにいたであろうか。

続く四撃が来る。

速い。

まるで一太刀にしか見えない。

しかし風圧からして四撃だ。

彼は碎けかけの盾に、魔法の斧を添える。

魔斧の刃は広い。

彼がこの武器を選んだのも、いざというときに盾に

できるからである。

彼はそうして愛する仲間を守ってきたのだ。

四撃凌いだ。

重騎士は同時に身をひねる。

歴戦の戦士は勘だけで四撃の裏に隠された暗殺の一

撃を躲す。

巨体だが、軽戦士のような動き。

剥がれた鎧の隙間に通すような精密な一撃を避ける。

これで計八撃凌いだ。

しかし斬撃は終わらない。



少女は空間を舞う。

舞踏は終わらない。

さらに五撃。

重さも速さも増した五回の剣。

すべて狙いは急所。

「——！」

城塞の呪文。

その第一小節を紡ぐ。

響き渡る低い声。

その音を切り裂いて、木枯らしのような鋭い音を立

てて赤い残光が走る。

盾が砕けた。

彼は盾を捨てた。

斧を両手で構えた。

まだだ、まだ防げる。

しのぎきる。

重騎士の揺るぎない心はリリナにも伝わっていた。

——できれば、一度生前に話をしてみたかった。

リリナは続く六撃を放ちながらそう思う。

彼は心まで国を愛する戦士だ。

リリナと同じく帝国の人や大地を愛する戦人なのだ。

「——！！！」

重騎士は果敢に立ち向かう。

疾風のような斬撃に、嵐のような斧の一撃をもつて

振り払う。

姿勢を崩しながらの最後のあがき。

しかしそれで六撃は防いだ。

計十九撃。

満身創痍の状態で彼はそれをすべて受け流した。

重騎士の殺意が膨れ上がる。

かような大技、使い切ったあとに反動で硬直してし

まうに違いない。

そこを狙って斧の一撃を頭上に叩き下ろす。

彼は姿勢を崩しながらも斧の刃を返す。

大きいほうの刃だ。

姿勢が崩れるのは仕方がない。

しかし、重心移動で補う。

攻撃に転化する。

重騎士は神への賛歌を謳いながら最後の斧を振るう。

風が斧にまわりついた。

彼が勝利を確信したとき――。

終わりの一撃が飛んで来た。

「……………」

斧は、落ちない。

天まで届けと振り上げられたまま、騎士の腕は静止

していた。

「はあ――、はあ……」

静寂の中で、少女の呼吸の音だけが聞こえていた。

緋色の刀身が、騎士の右頬を切り裂いていた。

魔法言語が青く輝く。

不死者の魔術が打ち破られる。

重騎士は持ち前の魔術抵抗で抗うが、妖刀の前には

どうしようもなかった。

彼は叫ぶように天に掲げた斧を震わせ。

黒く、灰となって消えた。

彼の着ていた鎧が音を立てて崩れ落ちる。

魔斧が刃を下に岩の大地に突き立つ。

竜の羽はたきのような風圧が、円形に広まった。

重騎士は――二度目の死を迎えた。

「……………」

リリナは一拍の間残心し――、すぐに重戦士の消えた向こうを見やる。

奇しくもアールと長身瘦躯の騎士の戦いも終焉を迎えていた。

「見事な剣技であった。この身が黒龍卿でなければ敗北していたのは僕のほうだっただろう」

全身に槍が突き立ち、針ねずみのようなになった長身瘦躯の騎士に、青年は静かにそう言い放っていた。

騎士は長大な剣を敵の魔術師に向けたまま、戦意だけは失わずに仁王立ちしていた。

「死ぬ」

アールの手にあつたツヴァイヘンダーが銀の弧を描く。

騎士の煌びやかな頭部鎧が斬り飛ばされた。

魔法の剣は不死者の命を吸い取る。

長身瘦軀の騎士は、己の長大な剣を天に掲げながら――、その場に膝をつき、やがて倒れ伏した。

祈りの間に寂寞とした空気が流れる。

リリナは自身に治癒魔術をかけながらアールに歩み寄った。

「よくやった。素晴らしい呪い返しだった」

魔術師はそれだけ言うのと長身瘦軀の騎士から槍を引き抜き始める。

リリナは手の中の妖刀に視線を落とす。

――戦いの最中に聞こえた声はなんだったのかしら？

そして一瞬見えた幻影はなんだったのか。

自分によく似た女性だった気がする。

しかし夢の中の出来事のようにそれは判然としなかった。

「どうした、リリナ？」

とび色の髪の青年が訝しげな顔を向ける。

リリナは首を振った。

「なんでもないわ。それより、だいぶん魔力を使って

しまったわ」

「あれだけの大魔術を弾き返せば普通そうなる」

「うん……」

アールは槍を回収し終わると、次は二体の騎士の鎧から宝石や金細工を剥がし始めた。ヒョードルの鎧にしていたことと同じだ。

「……………」

リリナはそれを黙って見ている。

不意に青年が声を上げた。

「リリナ」

「なに？」

「この短い間に強くなったな」

「――そんなことないわ。私が強いんじゃないわ、この赤いサーベルが強いんだよ……」

リリナはそう言つて唇を噛みしめた。

彼女の剣は重騎士の前にまったく通用していなかった。

幸運にも攻撃を避けることができ、剣の性能で何とか上回れただけだ。

彼がアンデッドではなかったら、最後の秘剣も頬を切り裂いただけで終わっていただろう。そのあとは返しの一撃で殺されていた。

どう考えてもリリナの実力ではなかった。

しかしアールは首を振った。

「いいや。短い間ながらもお前が必死に剣を振るってきたからこそこの結果だ。確かにお前の剣技は未熟で、こいつらのほうがお前よりもはるかに強かった。幸運にも勝てたと言うのが正しいかもしれん。しかし、僕と出会ったばかりのお前がその赤い魔剣を手にしたところで果たして勝つことができただろうか？」

「それは——」

無理だったに違いない。

村で一番になって天狗になっていたあの頃の自分では。

アールは金細工の採取を終えると立ち上がり、リリナに向き直った。そしてにっこりと笑う。

「お前は強くなった。これからも一層励むがいい」  
邪悪な笑みではなく爽やかな笑みだ。

リリナの黒い瞳が潤んだ。

「はい！」

「よし」

アールは頷くと改めてヒュドラの石像の下を見やる。

そこには最奥へと繋がる扉。

この迷宮探索の終着点がその向こうにある。

「心の準備はよいか？」

「ええ」

リリナは赤い妖刀を鞘に納める。

これより先は戦うために行くのではない。

生きる糧を得るために、肉を盗みに行くのだ。

抜くのは必要な一瞬だけ。

あとは納刀してひたすら逃げの一手だ。

「よし。では、行こうか」

アールは目を厳しくすると騎士の鎧をまたいで歩きだした。

リリナもその後が続く。

扉は二人が近寄ると誘うように独り独りに割れて開いた。

密閉された磯の香りが二人の鼻に届く。

地下の風は冷たかった。

目指すはヒュドラの肉――。

自殺行為とも思える凶行きよつこうの旅は、早くも終わりを迎

えようとしていたのだった。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富 1-3-7 ヨドコウビル  
TEL.03-3555-3431(販売) / FAX.03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、  
ホームページ上に転載することを禁止します。

本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。

また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**